

現代英語における認識様態副詞の分布： probably を事例として

水 野 江 依 子

1. はじめに

現代英語における *probably*, *evidently*, *certainly* などの認識様態副詞は、話者の心的態度を表すものとして解釈され、様態の意味では解釈されない。また、統語的にも様態副詞とは異なり、(1a) で示したように助動詞が2つ現れる場合、文頭、助動詞の前、助動詞の間に生起することができるが、本動詞の前及び文末に生起することはできないと言われている。助動詞が1つあるいは本動詞のみの場合は、(1b-c) に示したように文頭、助動詞の前、本動詞の前に生起することができるが、文末には生起できない。

- (1) a. (Probably) George (probably) will (probably) have (*probably) read the book (*probably).
b. (Probably) George (probably) will (probably) read the book (*probably).
c. (Probably) George (probably) read the book (*probably).

先行研究によると、認識様態副詞の意味は初期近代英語期 (1500-1700年) から徐々に発達し、現代英語における意味を担うようになったことが指摘されている (cf. Hanson (1987), Swan (1988))。Mizuno (to appear) では Helsinki Corpus を用いて初期近代英語期における認識様態副詞の分布の変化について調査し、意味発達と並行して生起する位置も徐々に現代英語における分布に近づいてきたことを示した。¹ 統語的振る舞いを調査することによって先行研究で指摘された意味変化に対する分析の妥当性を裏付けする形となった。このように副詞のような生起可能な位置が複数ある言語要素について単に生起可能な位置だけでなく、分布の傾向を示すことは意味があるように思われる。

本稿の目的は、認識様態副詞 *probably* をとりあげ、その分布をコーパス

を用いて調査することにより現代英語における認識様態副詞の特徴を分布の傾向という統語的観点から明らかにすることである。さらにアメリカ英語、イギリス英語のそれぞれの1960年代から1990年代の変化を辿ることによって現代英語における通時的・共時的変化を記述し現代英語における副詞の詳細な姿を概観する。

本稿の構成は以下のとおりである。2節では、使用する言語資料と調査結果について述べる。3節では、調査をもとに *probably* の分布の全体的傾向、アメリカ英語とイギリス英語の違い、1960年代から1990年代にかけての変化などについて考察する。4節は結語として本稿のまとめと今後の展望について述べる。

2. 調査方法

2. 1. 調査資料

本稿で使用する言語資料は、(2) で示した4つの現代英語書き言葉コーパスから集めたものである。

- (2) a. Brown Corpus
- b. LOB Corpus
- c. Frown Corpus
- d. FLOB Corpus

(2a) の Brown Corpus は1961年に出版されたアメリカ英語の散文資料を集めたものであり総語数100万語となっている。(2b) の LOB Corpus は1961年に出版されたイギリス英語の散文資料を集めたものであり、Brown Corpus と同様、総語数100万語となっている。(2c) の Frown Corpus は1992年に出版されたアメリカ英語で書かれた散文資料を集めたものであり、(2d) の FLOB Corpus は1991年に出版されたイギリス英語で書かれた散文資料が集められている。いずれも総語数は100万語であり、現代英語の特徴を調べるには十分な量であると思われる。²

これらのコーパスを選んだ理由は、1つには先に述べたようにこれらが十分なデータ量を含んだ現代英語を代表するコーパスであるということ、また1960年代と1990年代の同時期のアメリカ英語、イギリス英語がそれぞれ比較できるため現代英語における通時的・共時的言語変化について調査可能であ

るという点からである。

今回の調査では認識様態副詞の代表的な語である *probably* をキーワードとしてコンコーダンスを作成し、その分布について分析を行った。次節でその調査結果について示す。

2. 2. 調査結果

本調査では、*probably* の分布についてその特徴がよりよく分かるように次のように分類した。³ 下線部が副詞の生起する位置であり、() にその事例を示した。

- (3) ① 文頭 (Probably she doubted that.)
- ② 本動詞のみ ____ V (She *probably* doubted that.)
- ③ 助動詞 1 ③-1 aux ____ V (Douglass would *probably* wear some boring blue suit.)
- ③-2 ____ aux V (She *probably* would know no more fact.)
- ④ 助動詞 2 ④-1 aux aux ____ V (Accidents would have *probably* fallen as well.)
- ④-2 aux ____ aux V (I should *probably* have stuck with them.)
- ④-3 ____ aux aux V (I *probably* should have shot his pal first.)
- ⑤ be 動詞 ⑤-1 be ____ NP/AP/PP (He is *probably* the only man you've ever known.)
- ⑤-2 ____ be NP/AP/PP (This *probably* is why they are so popular.)
- ⑤-3 be ____ V-ing/V-en (She was *probably* telling the truth.)
- ⑤-4 ____ be V-ing/V-en (I *probably* was going to resign.)
- ⑥ 否定語 (It *probably* would not have been published.)
- ⑦ 文末(カンマ付き) (You'll be out of here in a week, *probably*.)

今回の調査では正確を期すために文として体を成しているものを調査の対象にし、(4)で示したように語句のみと現れているもの、省略のため副詞の正確な位置が曖昧となるものなどについては排除した。

(4) a. "Probably not." He shrugged his shoulders.

b. She would be here now, and *probably* with a little one ...

以上の調査の結果を表1として挙げる。⁴⁵ 数字はその位置に *probably* が現れた数である。(4)のように調査の対象としないものは総数から除いてある。⁶

(5) 表1

	①	②	③-1	③-2	④-1	④-2	④-3	⑤-1	⑤-2	⑤-3	⑤-4	⑥	⑦
BROWN (N=220)	33	36	43	19	1	3	0	42	6	18	1	16	2
LOB (N=220)	25	45	68	3	0	6	0	47	3	14	0	9	0
FROWN (N=226)	21	50	50	7	1	1	6	44	8	10	0	27	1
FLOB (N=183)	13	34	39	1	1	5	0	63	4	7	1	14	1
合計 (N=941)	92	257	200	30	3	15	6	196	21	49	2	66	4

3. 分析

3. 1. 全体的傾向

1960年から1990年代のアメリカ英語、イギリス英語をひとつの現代英語としてみた場合、文頭に現れる割合(①)は全体の9.8%と1割に満たないことが分かる。また、助動詞1つと共起した場合(③)、助動詞の前と後ろに生起することが可能であるが、助動詞の後ろに生起することが好まれる傾向にある。また助動詞2つと共起する場合(④)、もっとも好まれるのは助動詞と助動詞の間であるようだ。Be動詞の場合(⑤)もbe動詞の前後に生起可能であるが、助動詞1つの場合と同様、be動詞の後ろに生起する傾向が強い。このような全体的な傾向があるが、時代とイギリス英語、アメリカ英語につ

いて詳細に見た場合、違いがある。以下の節で詳しく論じる。

3. 2. 共時的考察

1990年代のアメリカ英語とイギリス英語を比較した場合、もっとも顕著な違いは助動詞2つと共起した場合の分布である。N数が少ないが、割合で示したものを表2として挙げる。

(6) 表2 (%)

	④-1	④-2	④-3
アメリカ英語 (FROWN)	12.5	12.5	75.0
イギリス英語 (FLOB)	16.7	83.3	0

④-2と④-3を比較してみよう。⁷ アメリカ英語では助動詞が2つある場合、2つの助動詞の前に現れる傾向がほぼ8割占めるのに対し、イギリス英語では助動詞と助動詞の間に現れる場合が8割であり、2つの助動詞の前に現れる事例は1例もなかった。1960年代のアメリカ英語とイギリス英語を比較した場合、この点についての両者の違いはなく、ともに助動詞の前に生起する例は1例もなく助動詞の間に分布している。この点においてアメリカ英語のみが *probably* の分布において変化を生じたかと思われる。

助動詞1つと共起している場合にも両者には違いが見られる。

(7) 表3 (%)

	③-1	③-2
アメリカ英語 (FROWN)	87.7	12.3
イギリス英語 (FLOB)	97.5	2.5

③-2が示すように、助動詞が1つ含まれる文中では、アメリカ英語では少ないとはいえ、1割程度が助動詞の前に生起することがあるのに対し、イギリス英語では、*probably* が助動詞の前に生起することはほとんどない。観察された事例は(8)の1例のみである。

(8) ... have gone out with him a few times, *probably* have gone to bed with him, and ...

助動詞との共起についての観察(6)-(7)から、イギリス英語では助動詞の前に分布する割合が低いといえるかもしれない。

次に挙げられる違いとしては、be 動詞と NP/AP/PP と共起する場合の副詞の分布である。

(9) 表4 (%)

	⑤-1	⑤-2
アメリカ英語 (FROWN)	84.6	15.4
イギリス英語 (FLOB)	94.0	6.0

表4から分かるように、イギリス英語ではbe 動詞と共起する場合、ほとんどの場合がbe 動詞の後ろに生起する。be 動詞の前に現れるもの(⑤-2)は、(10)で示したように、4例あるうちの3例がbe 動詞で終わる文であることから、これらは文末に認識様態副詞が生起することを避けるといった文体的な制約が働いていると考えられる。従って、イギリス英語ではbe 動詞と共起する場合、ほとんどの場合がbe 動詞の後ろに生起するといつてよいであろう。

- (10) a. I had come to the conclusion that it *probably* was, but then ...
 b. ..., where the trout *probably* are.
 c. ... is that she *probably* is.

3. 3. 通時的考察

次に現代英語における言語変化について考察していこう。わずか30年の間に変化が起こっていることがわかる。

1960年代と1990年代のアメリカ英語を比較した場合、もっとも顕著な違いは助動詞と共起しているときの認識様態副詞の分布位置である。割合で示したものが表5である。

(11) 表5 (%)

	助動詞 1		助動詞 2つ		
	③-1	③-2	④-1	④-2	④-3
1960年代 (BROWN)	69.4	30.6	25.0	75.0	0
1960年代 (FROWN)	87.7	12.3	12.5	12.5	75.0

助動詞が1つ文中にある場合、1960年代のアメリカ英語では認識様態副詞が助動詞の前にくる割合は3割程度あったが、1990年代になると1割程度

に減少している。さらに、助動詞2つと共起する事例においては、Brown Corpus においては助動詞と助動詞の間に *probably* が生起する割合が75%であり助動詞2つの前に現れる事例は全くなかった。それに対し、FROWN Corpus では助動詞と助動詞の間に生起するものが12.5%に減少し、助動詞2つの前に生起する割合が75%と逆転している。これは非常に興味深い変化である。

アメリカ英語、イギリス英語について共通して見られる通時的変化は、文頭に生起する *probably* の割合が少しではあるが減少しているという点である。利用可能な資料の中で文頭に占める割合を示したものを表6としてあげる。

(12) 表6

	①	
	アメリカ英語	イギリス英語
1960年代	15.0%	11.0%
1990年代	9.2%	7.1%

アメリカ英語、イギリス英語ともに1960年代は1割を超えていたが、1990年にはいるとそれぞれ、5～6%程度減少している。Mizuno (in press) の初期近代英語期における調査では、文頭に生起する認識様態副詞の割合が、EModE1期 (1500-1570) では0%であったのがEModE2期 (1570-1640) では25%、EModE3期 (1640-1710) では24%と意味の発達とともに全体の約4分の1を占めるようになったのだが、現代英語にはいると再び減少傾向にあるということが示された。⁸

be 動詞と共起している場合、生起可能な位置はbe動詞の前と後ろの2つの分布が可能であるが、これに関しては(13)(14)でそれぞれ示したようにアメリカ英語、イギリス英語ともに通時的な変化はほとんど見られずbe動詞の後ろに生起することが好まれている。

(13) 表7 (%)

	⑤-1	⑤-2
1960年代 (BROWN)	87.5	12.5
1990年代 (FROWN)	84.6	15.4

(14) 表 8

(%)

	⑤-1	⑤-2
1960年代 (LOB)	94.0	6.0
1990年代 (FLOB)	94.0	6.0

水野 (2006) では Chomsky (2001, 2005) の極小主義理論の枠組みにおいて一致 (Agree) およびフェイズ (phase) の観点から副詞の生起可能な位置について説明を与えており、そこでは、*vP* がフェイズとなって副詞の生起を阻止するという主張がなされている。⁹ この主張が正しいとするならば、(15) で示したように *probably* はフェイズの外側にマージされ、認可子である Mood_{epistemic} から認可されることになる。Be 動詞は Pollock (1989) で述べられているように T 位置へと顕在的に移動していると考えられる。

(15) [_{Mood^D} Mood_{epistemic} [_{TP} be_i *probably* [_{VP} t_i [_{VP} t_i]]]]

副詞が be 動詞よりも前に生起する事例は be 動詞が顕在的に移動しない稀な事例であるためであるといえよう。

4. まとめと今後の展望

本稿は1960年代及び1990年代のアメリカ英語とイギリス英語の書き言葉コーパスを用い、*probably* の生起位置について調査し、通時的、共時的考察を行った。これまでの副詞の研究は生起可能な位置に注意が払われ、それに対する認可の方法等が論じられてきた。本研究では生起可能な位置の中でも分布に変異があることを示した。これは副詞の認可のシステムを考える上で今後考えるべき示唆を残したと思われる。

またこの研究は、初期近代英語期から始まった認識様態副詞が現代においてどのような姿をとるようになったのかを示す一助となった。今後は他の認識様態副詞についても同様に調査し、さらに初期近代英語期と現代英語の狭間となっている後期近代英語期 (1700-1900年) における認識様態副詞の諸相を調査することによって、英語史においては比較的新しいこの副詞の歴史的な発達をより明確にしていきたい。

注

- ¹ ただし、文末に生じたものがEModE3期(1640-1710)においてまだ7%残っており、初期近代英語期に完全に現代英語の型に移行したとはいえない。
- ² (2)のコーパスに関する説明については大門・柳(2006)が詳しい。
- ³ Swan(1988)では、副詞の分布位置を4つに分けて調査しているが、本調査の目的はより詳細な記述をすることであるので、Swan(1988)の分類は不十分であると考え採用しない。
- ⁴ 全てのコーパスの総語数が100万語であるという共通性に加え、その中から利用可能な*probably*の語数がほぼ同一であるということは、分布の調査には信頼性があるように思われる。
- ⁵ スペースの都合上、全ての事例を挙げることはできないが、分類した全資料についてはweb上に公開する予定である。
- ⁶ 除いた数はそれぞれBROWN(40), LOB(52), FROWN(34), FLOB(55)であった。
- ⁷ 助動詞2つの後ろに現れる④-1のパターンがアメリカ英語イギリス英語ともに1文ずつ生じており、(1)の母語話者の判断と照らし合わせてみると問題がある。これについては今後の課題としたい。
- ⁸ *probably*固有の現象であるのか、認識様態副詞全体の現象であるのか、他の認識様態副詞の分布について調査する必要がある。
- ⁹ 副詞の認可に関する詳細な議論については水野(2006)を参照のこと。

参考文献

- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by phase," *Ken Hale: A life in language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2005) "On phases," ms., MIT.
- Hanson, Kristin (1987) "On subjectivity and the history of epistemic expressions in English," *CLS* 23, 133-147.
- 水野江依子(2006)「定形節における機能範疇の出現：文副詞の認可を中心に」日本英語学会第24回大会シンポジウム『極小主義理論の新展開と歴史言語学：言語変化における機能範疇の役割』発表原稿，東京大学
- Mizuno, Eiko (to appear) "A Corpus-based study of epistemic adverbs in Early Modern English," *Exploring the universe of language: A festschrift for Dr. Hirozo Nakano on the occasion of his seventieth birthday*, Department of English Linguistics, Nagoya University.
- 大門正幸 柳朋宏(2006)『英語コーパスの初歩』英潮社 東京
- Pollock, Jean-Yves (1989) "Verb Movement, Universal Grammar and the structure of

IP," *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.

Swan, Toril (1988) *Sentence adverbial in English: A synchronic and diachronic investigation*, Novus, Oslo.